

登録有形民俗文化財「若狭めのうの玉磨用具」^{たますり}について

垣 東 敏 博

はじめに

平成18年(2006)3月15日付で、当館が保管する「若狭めのうの玉磨用具」(327点)が登録有形民俗文化財に登録されたので、その概要について紹介する。なお、登録有形民俗文化財とは、平成16年(2004)5月の文化財保護法改正によって従来の登録制度が拡充され、平成17年(2005)4月1日から有形の民俗文化財も登録の対象となったものである。平成18年1月20日の文化審議会の答申を受け、最初の登録有形民俗文化財として「若狭めのうの玉磨用具」とともに「勝沼のぶどう栽培用具及び葡萄酒醸造用具」(500点・所有者 山梨県甲州市)、「雲州そろばんの製作用具」(143点・所有者 雲州算盤協同組合)の3件が登録された。

1 若狭めのう細工の歴史

小浜市遠敷を中心とする若狭地方で行なわれてきた若狭めのう細工の歴史は、享保年間(1716~35)までさかのぼると伝えられている。大正4年(1915)発行の『福井縣遠敷郡遠敷村産業誌』には次のように記されている。

遠敷瑪瑙細工の創始は今を去ること凡そ壹百九十餘年前遠敷村の人喜兵衛と云ふ者浪華の或る眼鏡屋にて金剛砂の使用法を習ひ而して奥州津輕に遊び瑪瑙石を火爐に埋め固有の色澤を現はす事を修受し其後郷里なる遠敷村に歸り自宅に於て丸玉の製造業を開き製法を極めて秘密に為し居りしも親族又は雇人等より製法を漏したるならん終に他に之れを製する者出來したり⁽¹⁾ (後略)

また、明和4年(1767)に著された『稚狭考』の「第六 製造商賣」に「近年はしめて興れる職業には扇子箱・傘・同しくろくろ引・弓削・矢師・玉磨・繡工あり⁽²⁾」と記されているが、このうちの「玉磨」が、遠敷村のめのう玉製造を指しているものと思われる。

江戸時代には緒締玉や数珠玉、かんざし玉などの玉生産のみであったが、明治の初めに彫刻技法が開発され、香炉や盃、仏像、動物類の置物、装身具などが製作されるようになった。これらの製品は万国博など各種の博覧会へも出品され、美術工芸品としての声価も高まった。昭和51年(1976)には伝統的工芸品産業の指定を受けている。そのいっぽうで、江戸時代以来の伝統的な技法による玉製造は次第に衰退し、昭和30年代(1955~1964)にはほとんど行なわれなくなった。

原料のめのうはこの地方ではとれず、古くは島根、石川、富山などから運ばれ、明治の中頃からは北海道で採掘した良質の原石を長く使用してきた。また、喜兵衛が津輕において焼き入れ法を習得したと伝えられることからわかるように、若狭めのうの生産は北前船などの日本海交易に支えられてきたといえよう。なお、現在は比較的安価なブラジル産の原石を輸入して使用している。

2 玉磨の工程とその用具

若狭めのうの製造業者は玉の製造のことを「玉作り」ではなく「玉磨(たますり)」と言っている。若狭めのうの玉製造は、使用する用具からみても、「玉磨」と呼ばれてきた

玉作り職人の技術の系譜をひいている。たとえば享保17年(1732)の『万金産業袋』の「万玉類」の項に「扱惣じて玉のこしらへひも通しは、みな鑽に金剛砂を用ひそろそろと彫。急にほれは石をくだく。すりやうは鉄にてちいさきわり竹のこことくなる、樋といふ物をこしらへ置、手たらいに水をいれ、右の鉄の樋をすへて、金剛砂に水をそゝき玉を串にさして、爰の図のこことくしてする(3)」と記している。そしてこの『万金産業袋』の図や、元禄3年(1690)の『人倫訓蒙図彙』の玉磨(「珠摺」と書いた)の図(4)には、若狭めのうの玉磨用具と同じような道具が描かれている。なお、『人倫訓蒙図彙』の図について「柄のついた太い棒状のものと弓状のものは不明(5)」とされているが、おそらくは石切り鋸と、石を固定するための竹(図には1本しか描かれていないが本来は2本使用、写真4参照)であろうと思われる。このように、江戸時代以来の伝統的な道具が、若狭めのうの玉磨用具には多く含まれているのである。

玉磨の工程は、焼き入れ→石を切る→欠き込む→穴を開ける→削る→磨く、という順序になる(写真4～8参照)。サイコロ状に切った石を、欠き込みによっておおそ太鼓のような形に整形し、太鼓の革にあたる部分に両側から穴を開けていく。開いた穴に削り棒や磨き串を差し、削り、磨く作業を行なう。このように研磨の工程の前に穴開きの作業が入るのが玉磨の仕事の特徴で、穴を中心にまわしながら削っていくため、出来あがる玉の形状は、球形、ナツメ形、卵形などに限られた。

以上の各工程に用いられた用具や材料がほぼそろっている(写真1～3および一覧表参照)。この資料群の中心となる若狭瑠璃商工業協同組合旧蔵の資料が、もともと若狭めのう会館での展示に使われていたものであるため、各工程用の見本石材(半製品)も含まれる。それぞれの用具は、だいたい昭和30年代頃まで使われていたものである。

玉製造業者は「玉屋」と呼ばれた(これに対して彫刻物製造業者を「細工屋」と呼んだ)が、昭和30年代頃までの玉屋の業態は分業制であった。親方(組合員)が注文をとり原石を仕入れ、焼き入れする。窯の大きさや使用する炭、温度、時間など、よい発色をする焼き入れの極意はそれぞれ秘伝とされた。他人に知られないよう、蔵の中で焼く者があったとも伝えられている。その後の工程は、遠敷(島・中村・市場・池田・検見坂などの小字がある)、金屋、国分、東市場など遠敷周辺の家々に住む職人が分担した。各工程それぞれ別の職人が行なうのが普通であった。職人といっても、農商業の副業として行なう者が多く、穴開けや磨きなどは婦人たちの仕事であったという。用具や材料は親方から支給された。親方の販売の方法は、店での小売りよりも、京阪神方面へのまとめ売りが主であったという。

登録有形民俗文化財「若狭めのうの玉磨用具」は、若狭地方でのめのうの加工技術はもちろん、わが国の玉の製造技術の一端を示す資料として貴重なものである。

註

- (1) 福井縣遠敷郡遠敷村役場編纂『遠敷郡遠敷村産業誌 附 村誌概要』(1915年)、67頁。
- (2) 法本義弘校訂『拾椎雑話・稚狭考』(福井県郷土誌懇談会、1974年)、670頁。
- (3) 吉田光邦解説『万金産業袋(生活の古典双書5)』(八坂書房、1973年)、80頁。
- (4) 朝倉治彦校注『人倫訓蒙図彙(東洋文庫519)』(平凡社、1990年)、168頁。
- (5) 遠藤元男『日本職人史序説(日本職人史の研究I)』(雄山閣出版、1985年)、364頁。



写真1 ヒガマ (火窯)、タライ、金剛砂、スイノウ、めのう原石

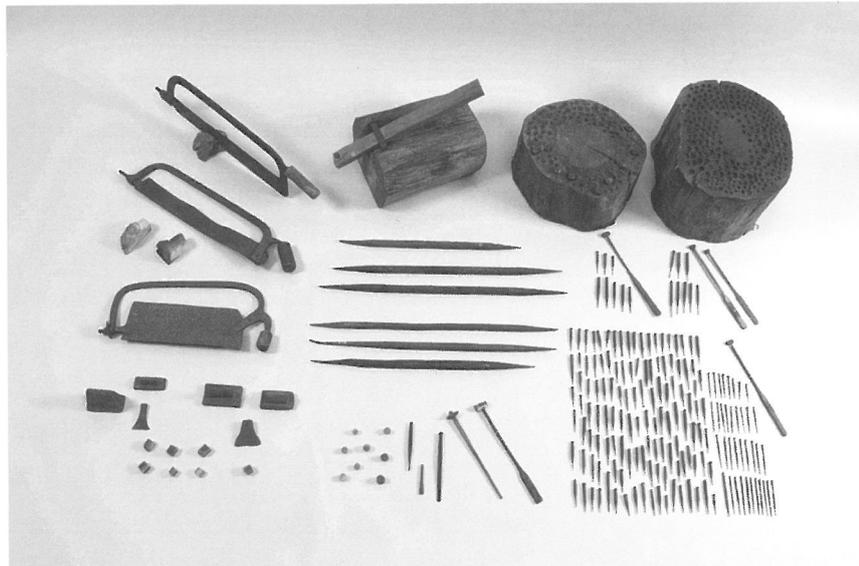


写真2 石を切る、欠き込む、穴を開ける工程の用具と半製品

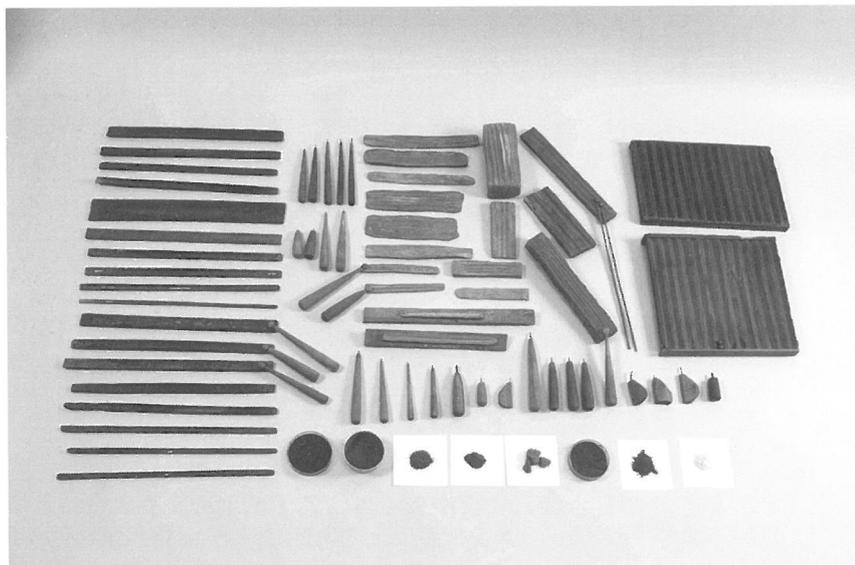


写真3 削る、磨く工程の用具・材料・半製品および玉コロガシ



写真4 石を切る
金剛砂をつけながら、石切り鋸で石を切り、サイコロ状にする。



写真5 欠き込む
石を欠き台におさえ、欠き金を使って角を落としていく。



写真6 穴を開ける
穴開け台に石をのせ、金剛砂を菜種油で練ったものをつけながら、穴開け矢を回転させ小槌でたたいて穴を開ける。



写真7 削る
鉄樋の上で、削り棒に差し込んだ石を削ってゆき、玉に整形する。



写真8 磨く
桐の磨き板の上で、磨き串にさした玉を磨く。

写真4～8 提供：若狭瑠璃商工業協同組合

たますり
登録有形民俗文化財「若狭めのうの玉磨用具」一覧表

工程	用具名	員数	採集地	旧蔵者	備考
焼き入れ	ヒガマ（火窯）	1	小浜市遠敷	坂上儀一	原石の焼き入れに使用する。灰の中に原石をうずめ、炭火を燃やして焼き入れする。ゆっくり時間をかけ、大きな石の場合は半年から1年かけることもある。
	めのう原石	2	小浜市遠敷	〃	めのうの原石は、焼き入れによって含有鉄分が酸化することによって鮮やかな紅色に発色する。 原石はこの地方ではとれず、古くは富山や石川、島根県産の原石を用いていたといい、明治以後は北海道に良質の原石を発見し、組合で協同採掘してきた。戦後は安価なブラジル産の原石を使用。
	めのう原石（焼き入れ前）	1	小浜市遠敷	内藤嗣郎	
	めのう原石（焼き入れ後）	1	小浜市遠敷	〃	
	北海道産めのう原石	5	小浜市遠敷	〃	
	タライ	1	小浜市遠敷	坂上儀一	石を切る、削る、磨く工程において、研磨剤は水に混ぜて使用するため、タライの中で作業を行なう。砂（泥）よけ用に、ブリキ板を取りつける。
	金剛砂	1	小浜市遠敷	〃	こんごうしゃ。コンゴウズナと呼ぶこともある。石を切る、削る工程において使用。炭化珪素粉末（カーボラダム）の研磨剤も含めて金剛砂ということもあるが、もともと金剛砂と呼ばれたのは、ザクロ石やガーネットなどの硬度の高い石を細かく砕いたもの。
石を切る	石切り鋸	2	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	焼き入れした原石は、まず板状に切り、そのあとサイコロ状に切る。石切り鋸で金剛砂をつけながら削り切ってゆく。 石切り鋸で3分の1～半分の深さまで切ったあと、石割り台とクサビを使って石を割る。
	イシキリノコ	1	小浜市遠敷	赤崎一郎	
	石割り台	2	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	
	石割り台	2	小浜市遠敷	内藤嗣郎	
	クサビ	1	小浜市遠敷	〃	
	クサビ	1	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	
	石を切る工程用見本石材	8	小浜市遠敷	〃	
	石を切る工程用見本石材	1	小浜市遠敷	坂上儀一	
欠き込む	欠き矢	2	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	欠き込み（サイコロ状の石の角を落としていき、玉の形に近づけて行く作業）のうち、荒欠きは、欠き矢と小槌を用いて行う。
	欠き矢	1	小浜市遠敷	内藤嗣郎	
	小槌	2	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	
	欠き台	1	小浜市遠敷	〃	荒欠きが終わった石は、欠き台におさえて、欠き金を使い、小欠きする。
	欠き金	1	小浜市遠敷	〃	
	カキガネ	3	小浜市遠敷	坂上儀一	
	欠き金	2	小浜市遠敷	内藤嗣郎	
	欠き込み工程用見本石材	8	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	
	欠き込み工程用見本石材	1	小浜市遠敷	坂上儀一	

工程	用具名	員数	採集地	旧蔵者	備考
穴を開ける	穴開け台	1	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	穴開け台の上のせた石に、金剛砂を菜種油で練ったものをつけながら、穴開け矢を回転させ小槌でたたいて穴を開けてゆく。 両側から穴を開けていき、貫通したら、スヒキと呼ぶ作業を行う。細い針金から少しずつ太い針金を穴に通して、穴を削り広げ仕上げていく。
	穴開け台	1	小浜市遠敷	坂上儀一	
	穴開け矢	8	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	
	穴開け矢	8	小浜市遠敷	坂上儀一	
	穴開け矢	159	小浜市遠敷	内藤嗣郎	
	小槌	1	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	
	小槌	2	小浜市遠敷	坂上儀一	
	小槌	1	小浜市遠敷	内藤嗣郎	
	穴開け工程用見本石材	7	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	
削る	鉄槌	4	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	「玉スリのヒ」とも呼ぶ。削（す）る工程で、この鉄槌の上で削り棒に差し込んだ石を削ってゆき、玉に整形する。荒削り、中削り、仕上げ削り、泥かけという順序で、使用する金剛砂（研磨剤）を徐々に細かくしていく。
	鉄槌	2	小浜市遠敷	坂上儀一	
	鉄槌	4	小浜市遠敷	赤崎一郎	
	鉄槌	8	小浜市遠敷	内藤嗣郎	
	削り棒	5	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	「スリボウ」と呼ぶ。「磨き棒」と呼ぶ場合もある。削る工程で、玉を差し込んで用いる。
	削り棒	9	小浜市遠敷	坂上儀一	
	削り棒	7	小浜市遠敷	内藤嗣郎	
	スイノウ	1	小浜市遠敷	坂上儀一	研磨剤の粒度をそろえるために使用するふるい。水につけて使用する。
	金剛砂	1	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	金剛砂は、最初は30番ぐらいのものを仕入れて荒削りに用いる。これを「荒砂」という。「荒砂」が砕けて細くなったものをふるいにかけて、60番ぐらいのものを中削りに使用する。これを「中砂」という。仕上げ削りに使用する「上げ砂」は、100番～120番ぐらいである。 ガーネットなどの金剛砂に比べて、炭化珪素粉末の研磨剤（カーボランダム）だと、粒のそろったものを仕入れることができるので、ふるいをかける手間がかからず便利に使える。カーボランダムは昭和20年代後半には使用されていた。
	研磨剤（炭化珪素）	1	小浜市遠敷	〃	
	研磨剤（炭化珪素）30番	1	小浜市遠敷	坂上儀一	
	研磨剤（炭化珪素）100番	1	小浜市遠敷	〃	
	ドロ	1	小浜市遠敷	坂上儀一	200～400番の細かな粉末は、ふるいにかけるには手間がかかりすぎて無理で、鉄や石の粉末も混じるので、乾かしても粉状にはならず泥のようになることから「ドロ」と呼ぶ。水の中で攪拌したあと沈殿させると、上から下へ、細かい粒から荒い粒になるので、適度のものを手ですくって「泥かけ」や「泥磨き」に使用した。
	削る工程用見本石材	5	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	

工程	用具名	員数	採集地	旧蔵者	備考
磨 く	鉛樋	10	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	「ミガキ用ナマリ」とも呼ぶ。玉を磨く工程で、磨き串（または磨き棒）に差した玉を、この鉛樋の上で、細かい金剛砂を使って磨く。これを「荒磨き」または「泥磨き」ともいう。
	鉛樋	2	小浜市遠敷	坂上儀一	同上。板の台がついている。
	砥石	1	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	「荒磨き」「泥磨き」には、鉛樋の代わりに砥石を使用する場合もある。
	砥石	1	小浜市遠敷	坂上儀一	
	磨き板	2	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	仕上げ磨きに使用する桐の板。この上で磨き串に差した玉を磨く。
	磨き板	1	小浜市遠敷	坂上儀一	
	磨き串	2	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	仕上げ磨きに使用する竹の串。玉を差して、磨き板の上で磨く。
	磨き棒	5	小浜市遠敷	坂上儀一	削り棒と同じ形態のものであるが、ベンガラや酸化クロームの緑色が付着している。 風鎮などに使用する大きな玉の場合には、磨き串では強く磨けないため、削り棒と同じものを使用した。
	磨き棒	4	小浜市遠敷	内藤嗣郎	
	房州粉	1	小浜市遠敷	坂上儀一	白色の粉末。 仕上げ磨きには、房州粉とベンガラをまぜて使用し、ツヤを出す。
	ベンガラ	1	小浜市遠敷	〃	赤色の粉末。
	仕上げ磨き用酸化クローム	1	小浜市遠敷	若狭瑠璃商工業協同組合	緑色の粉末。 房州粉・ベンガラを使った柔らかなツヤに比べて、強く鮮やかなツヤが出る。 酸化クロームは昭和20年代後半には使われていた。
	磨く工程用見本石材	4	小浜市遠敷	〃	
	磨く工程用見本石材	1	小浜市遠敷	坂上儀一	
	玉コロガシ	2	小浜市遠敷	赤井幸子	波型に溝を切った板。この上に出来あがった玉を並べて検品したり、数を数えたり、色味や大きさをそろえるなど、玉の選別に使用した用具。
	(合計)	327			

※ 本稿をまとめるにあたり、高鳥純一氏より種々ご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

(福井県立若狭歴史民俗資料館 学芸員)